

「女学生神話」の誕生を巡って

平石典子

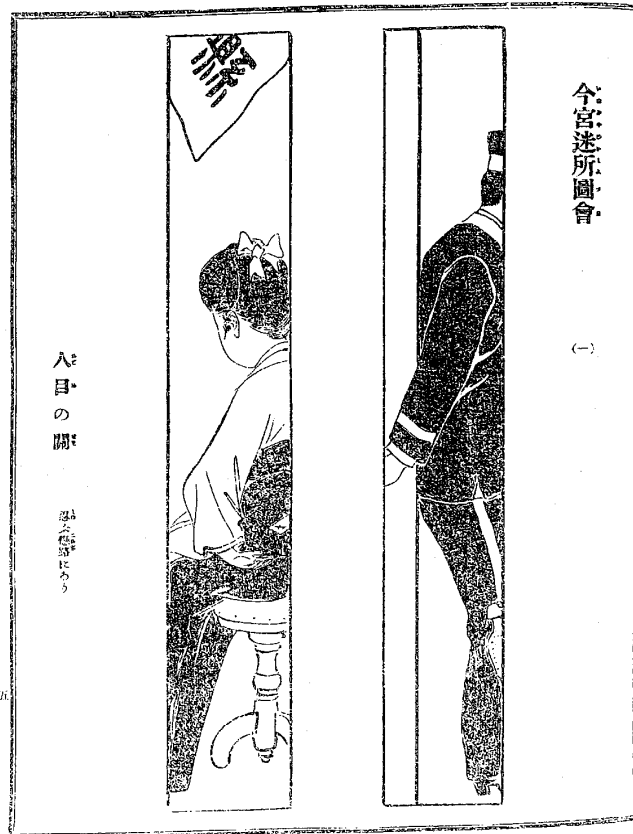
【論文要旨】

明治後期の日本において、「女学生」は「女子学生」という字義上の意味以上のものを人々に訴えかける存在であった。本論では、高等女学校の成立過程、女学生を主人公にした文学作品の分析などを通して、「女学生神話」がどのようにして成立していったのかを追っている。

明治初期の女学生は、ネガティブにとらえられることが多かったが、明治三十年代に入ると、良妻賢母主義に女子教育の標準が定まったことも手伝って、高等女学校は乱立の時代を迎える。その結果、彼女たちは都市における西洋風の美の代名詞のように扱われることとなる。しかし、その一方で、「西洋風」の「恋愛」への憧れと無用心な下宿環境は、彼女たちが「性的に奔放」だというレッテルを貼る。この仮説は、新聞小説やスキャンダル記事によって強化され、「西洋的な美しさを持ち、積極的で性的にも奔放」な存在としての「女学生神話」が確立するのである。

はじめに

明治の社会風俗を考える時に、まず間違いない言及される存在が「女学生」である。髪に大きなリボンをつけ、袴をはいたその姿は、明治後期のメディアを賑わせるものだった（【図一】）。また、明治の文学においても、「女学生」の演じる役割は大きかった。柄谷行人は、



【図1】『滑稽新聞』明治36年3月

日本の近代文学は、二葉亭四迷でも山田美妙でも、だいたい「女学生」という存在にショックを受けたところから始まっています。異性が知的である、つまり、対自存在としてあるということへの困惑から始まっている。

とある討議で述べているが、『浮雲』のお勢、『蒲団』の芳子など、文

学作品のヒロインに女学生が選り取られている場合は少なくない。また、小杉天外の『魔風恋風』や小栗風葉の『青春』のように、一世を風靡した「女学生」物語もある。

しかしながら、先にひいた『滑稽新聞』の諷刺画と、柄谷の発言、それに『魔風恋風』、或いは『蒲団』を並べてみると、どうも釈然としないうものがある。どの例においても、「女学生」は若者の「恋愛」の対象となつてゐるわけのだが、明治二十年の『浮雲』と明治三十六年の『魔風恋風』の間では、「女学生」という存在の認識が異なつてゐるよう思ふのである。実際、「女学生」を論じる時に『魔風恋風』はよく取り上げられるテキストであるが、その際に研究者たちが指摘するのは、この小説において女学生が「醜聞」や「墮落」と結び付けられていることである。一体、この両者を隔てる時間に、「女学生」という存在を巡つてどんな言説が飛び交い、どのような「神話」が生まれるに至つたのだろうか。本論では、これまであまり触れられることのなかつた明治三十年代初頭のテキストを分析することによつて、「女学生神話」がどのように成立したのか考えてみたい。

（一）「開かれた」少女たち——明治の新教育

まず、明治期の女子教育が少女たちに何を求めたかについて簡単に述べておこう。

明治期の女子教育は、さまざまな紆余曲折を経ることになったが、そのスタートは驚くほど早いものであった。明治三年、横浜にフェリス英和女学校が開校する。翌年には、やはり横浜に共立女学校ができ、十一月には津田梅子や山川捨松らの少女五名が米國留学に出発した。五年に

なつて学制が發布されると、東京女学校、開拓使女学校が、八年には東京と石川に女子師範学校も開校し、明治二十年までには全国に公立、私立をあわせて五十校ほどの女学校が設立されたようである^三。

明治維新直後の動乱期に女子教育がこれだけ重視されたのは、当時学制制定などに関わつたのが「洋学派」と呼ばれる人々だったからである。明治四年に五人の少女をアメリカへ送り出すきっかけをつくつた、北海道開拓使次官黒田清隆は、訪米した際に米國婦人の教育と社会的地位の高さに驚いて女子教育の必要を痛感したという^四。明治女学校の初代校長木村熊二も、米國留学中、明治五年六月六日附の妻への手紙に「日本の女は無学ニ而 当地の女とくらべ候へは 実に氣の毒の様に存じ候^五」と書いている。また、最初期に開校したフェリスや共立といった学校はキリスト教系のミッションスクールであり、欧米から教師を招いていた。ある意味では、女子教育の場においては最初から「欧米の婦人」が目標として想定されていたといえるかも知れない。日本の女学校へも教師として多くの女性が赴任し、津田梅子なども学んだアメリカ合衆国の場合、一八三七年に初めての女子大がマウント・ホリオークに創設され、一八七〇年にはコーネル、ミシガンといったいくつかの総合大学も女性に門戸を開いている。一八八〇年には合衆国全土で女性を受け入れるカレッジは一五三校にも及び、およそ四万人、実に高等教育を受ける全学生人口の三分の一が女性だったというのだから、驚きである。しかも、十九世紀に創設された女子の高等教育機関の目的は、良妻賢母の枠を超えた教育の提供であった。そこでは男子教育と同じように知性の啓発に力を注がれ、卒業生の多くは医師、教授、組合活動家、宗教活動家、福祉活動家として社会的にも経済的にも自立した存在となつた。但し、ここで確認しておかなければならないのは、高等教育を受ける

女性たちの社会的階級についてである。合衆国において、女子高等教育は、中産階級のためのものであった。富裕階級では、女性が高等教育を受けることなどんでもないことで、適齢期には身分相応の男性と結婚するのが当たり前だったのである。翻ってみれば、明治日本の女子高等教育は、合衆国の女子大の前段階、即ち若い女性を素晴らしき家庭生活活のために訓練する女子修養会の性格を有したものであった。そして時代を追う毎に、日本の女学校は良妻賢母養成を目的とするようになっていく。こうなることによって、上流階級の子女もこぞって女学校に進み、また在学中に結婚の話がまとまって退学するのが「花道」となるような、日本独自の女学校文化が生まれることになる。

ともあれ、男女同権、平等という新しき主義のもと、最初の女学生たちのある者は男袴に身を包んで街を闊歩し、またある者は鞆たづなにのって大騒ぎをしたのである。男袴も、ブランコも、維新前の乙女たちには無縁のものであったろう。女子学生はともかくも外に対して開かれた存在となったのである。彼女たちが「外の世界」に踏み出したことは、明治社会にとって重要な意味を持つことになる。

さて、外に一步踏み出した少女たちは、やがて極端な欧化主義の洗礼を受けることとなった。明治十六年に落成した鹿鳴館時代の到来である。それはつまり「社交界」の誕生を意味していた。明治期の美は芸者美であったと語るのは長谷川時雨だが、確かに、明治年間ほど芸者が名士の夫人となって社交界を賑わせたことはないであろう。井上章一は『美人論』の中で、夫婦同伴の社交生活が日本の上流階級にひろがりだしたことが、美人に執着し、芸者を妻にする明治の政治家たちの出現の原因だと指摘し、美しい芸者上がりの貴婦人が西欧人の目からは立派な社交家とみられていたこと、しかし家柄の良い貴婦人連には冷やかな眼で見ら

れていたことなどを紹介している。

日本の社交界を形成することになった人々の殆どは、公家、武家という階級の出身者であった。そして彼らの社会では、外にいるのは男で、女は「内」にいるものだった。外にいて多くの男と接するテクニクは、商人女や芸妓に任せておけばよかったのである。ここでは、「内」に属する女と、「外」に属する女の間にはっきりとした境界線があったといえるだろう。ところが、明治の西洋文化の移入は、女性を外に連れ出し、社交界の出現は、この「内の女」と「外の女」の境界線をあいまいにした。つまり、社交界という「場」が、家庭の女に芸者の社交性を求めるようになったのである。とはいっても、今まで奥床しくしとかに育てられてきた女性がそう簡単に変わるものではない。そこで芸者という「外の女」が妻として迎えられ、貴婦人としてスポットライトを浴びることになる。自分たちの領域に踏み込まれた「内の女」たちが、それに対してよい顔をするはずがない。彼女たちは新参者の社交性を「芸者上がり」と軽蔑することによって、自らのプライドを保っていたのであろう。

このような状況のもと、当然変わってくるのが子供の教育である。自分たちにはとても出来なくても、新教育を受ける娘たちには西欧風の社交性も身につけさせたい。そんなわけで、明治十八年二月十三日の東京横浜毎日新聞には、次のような記事が出た。

○舞踏亦学科中に加はらんとす

貴婦人舞踏は追々盛に行はる、を以て自今學習院及び女子師範學校其他の學校等に於ても學科中に舞踏の一科を加へんとて目下各貴頭中にて専ら協議中なりと又某貴頭には府下に一の舞踏演習場を建設せん

と計画し居る由

そして実際、東京女子師範学校では、翌年に舞踏を校内に導入、十月には高等女学校の生徒と帝国大学の生徒で舞踏会を開かせたのである。また、明治二十年の四月には、同校に会話、舞踏、音楽をもって「善良なる男女交際」を目的とした「和楽会」が設けられた。当時の女学生の一人、三宅花圃は、この頃のことを次のように回想している。

當時のお茶の水は、所謂欧化主義の全盛期でございましたから、女学生の風俗も、束髪に洋装といふハイカラな恰好で、土曜日の午後には和楽會と申しまして、學校のなかでダンスの會が開かれてをりました。この和樂會は、男女交際の道を開くとしても申しませうか、櫻井錠二とか、神田乃武とか、矢田部良吉とか、大學の先生方がよくダンスしにおいてになりました。またピアノの先生の瓜生繁子さんの御主人の關係でか、短剣をさげた海軍の軍人さんも、多勢お見えになつてゐたやうでございます。

土曜日の午後になりますと、さすがに女學生の方でも、そはそはする様子が見えました。なかには理容室へ行つて、一寸白粉をつける女學生もございました。勿論、このダンスのために、風儀がどうかうといふことはなかつたと思いますが、一般の社會からは非常な誤解をうけまして、新聞などではずる分攻撃されたことがございました。^八

どうやらこのあたりが、「男女交際」の始まりのようである。そして、自らの意志はどうあれ、開かれた男女交際の先端となった女學生たちが、世間の好奇の目、揶揄や中傷、非難の的となつたのは当然のことでもあつ

た。音楽はまだしも、男性との会話や、男性と組んでの舞踏、などというものは、「内」に属する良家の子女のすべきことではなく、どうしても彼女たちは、芸妓の姿と重なってしまうのだから。伊藤内閣の失墜とともに鹿鳴館時代は終わり、女學生の洋装や夜会も廃れてしまうことになるが、「男女交際」と「女學生」はその後もずっと、人々の意識の中であつたり続けることになる。

(二)『薺の鶯』の少女たち

それでは、この時期の文学作品の中の女學生はどのような存在なのだろうか。

『浮雲』のお勢は、漢語交じりの男女交際論を唱え、「ナシヨナル」の「フォース」に列國史スプリントといった高度のテキストをさらうだけの英語力もある。とはいっても、この作品には、実はお勢は単に、「根生の輕躁者それもの」で、「根がお茶ツぴい」だから流行に染まりやすいのだと書かれている。

其後英學を初めてからは、悪足掻もまた一段で、襦袢がシャツになれば唐人鬚も束髪に化け、ハンケチで咽喉を緊め、鬱陶敷うっとうしいを耐へて眼鏡を掛け、獨よがりの人笑はせ、天晴一個のキャッキヤとなり済みました。^九

なにしろファッションなのだから、飽きればおしまいである。第十八回では、編物の稽古に通い出したお勢が、英語より編物が面白くなるとともにそれまでの薄化粧をやめ、「こつてりと、人品を落すほどに粧つて」行くようになったことも描かれている。

しかしながら、文三にとっては、お勢の魅力は、共に新時代に向かっ
ていく価値観の持ち主であることだ。自分にとって親より大切な者は
「真理」だ、というお勢の言葉に、文三は知的なショックを受ける。そ
して、彼が免職になったことにも、当初のお勢は寛大である。その要領
の悪さに腹をたてるお政とお勢は議論し、文三の心配に対して、「君
の為に辯護したの。(傍点論者)」といかにも新知識人らしい言葉で彼
女は答えるのである。このような彼女を、文三は自分の同志と感じる。
社会と相容れることのできない自分を、唯一理解してくれるに違いない
女性——。文三がお勢にひかれるのはこのためであり、そう信じたお
勢が彼の期待通りに振舞ってくれないことが彼を追いこんでいくことにな
る。確かに、この小説を見る限りでは、新教育を受けた「女学生」は
知的な存在であり、お勢の新しい知性(例えそれが見かけ倒しのものだ
たとしても)こそ主人公は惹かれていた。

ところが、このような認識は必ずしも一般的ではなかったようだ。
『浮雲』の第一編が出たのは明治二十年六月だったが、翌年、女学生を
主人公に据えた小説が発表された。三宅花圃の『薺の鶯』である。当時
二十一歳、逍遙の門下生で、東京高等女学校の学生だった花圃のこの作
品は、女学生版『当世書生気質』ともいえるようなもので、当時の女学
生たちの風俗も描き出されていた。ここでは女学生はどのような存在な
のだろうか。彼女たちの会話を拾ってみよう。

斎「ですがネー。わたくしは夕べをかしな夢を見てヨ。福ちゃんがネ女
になつて。私の兄の処へよめにきたいといひ升から。そんな事をいはな
いで本との男になつて。あたしのおむこさんにおんななさい……。兄さ
んハネ。夜会でお目にかゝるミス服部といふ人が大へんに好ですから。

お気の毒様といつたら福ちゃんがおこつて。

女「ヨー斎藤さんもうおよしなさいヨ。サア」トかすていらをペンナ
イフで切て出す「メネーメネー。サンキュー。ホワ。ユウワ。カイン
ド。と片言の英語を囁りながらチヨイとつまんで「それからネー宮崎
さん。

宮「モウおよしなさいヨ。あなたは磊落だからおかまひならぬけれ
ど。ヨーもうよして頂戴。

斎「ハイ、恐れ入りました。ぢやア相沢さんをつれてきて。あた
しは一所にお咄しをするワ」とバタ／＼たべながらかけて行。

宮「ほんとに「クイッキ、モーション (Quick motion) ナネー。」

『薺の鶯』単行本の序の中で、坪内逍遙が庄巻と誉めた女学校の場面
である。お菓子を食べながらぺちやくちやくとお喋りに花が咲くのは今も
昔も変わらないようだが、彼女たちが英語交じりの会話をしていたとい
うのは興味深い。女学生の英語は、男子学生のドイツ語のように隠語化
することは少なかったようだが、それでも彼女たちの特異性を際立た
せるものではあった。英語交じりの会話や洋書などは、女学生であるこ
と、或いは女学校で教育を受けたことを示す小道具として、使われ続け
ることとなる。

しかし、この物語においては、こんな無邪気な女の子たちが既に自ら
の立場の逆説性を何となく感じていることが描かれている。「勉強する」
ために高等女学校に通っている彼女たちは、卒業後社会の中に何らかの
形で出て行きたいという夢も持っているのだが、結局社会が彼女たち
に求めているのは「良妻」であり「賢母」なのだ。そして、一度「女学
校」というところの空気を吸ってしまった彼女たちにとっては、ただ夫

や子供に仕えるのは納得できない道ということになる。

服「ですけれども。大変に御体には御毒ですネー。女生徒は男生徒より大気でないせへか。あんまりなまけませんでネ。ですからそんなに勉強を勧めてさせないでも。自分自身に相応に勉強して行ますとサ。でも此頃は大変に女に学問をさせるのが一問題でムリ升と。あんまり相沢さんのやうに。過度に勉強遊ばすと精神がよわつて。よわい子が出来るさうです。

相「アラいやなこつたワ。だれが御嫁なんかに行くもんか。

宮「あんなことをおつしやるヨ。先生になつても御嫁に行方がいゝつて。

相「ナニ先生になれば男なんかにひざを屈して。仕ふまつてはゐないはネー。

服「ですからこの頃は學者たちが。女には學問をさせないで。皆な無學文旨にしてしまつた方がよからうといふ説がありますとサ。少し女は學問があると先生になり。殿様は持ぬといひ升から。人民が繁殖しませんから。愛國心がないのですとサ。明治五六年頃には。女の風俗が大そうわるくなつて。肩をいからしてあるいたり。まち高袴をはいたり。何か口で生いきな慷慨なことをいつて。誠にわるい風ださうでしたが。此頃大分直つてきたと思ふと。又西洋では女をたつとぶとか何とかいふことをきいて。少し跡もどりになりさうだといふ事ですから。今の女生徒は大責任があるのでムリ升と。……三

ここには、女学生として教育を受け、さまざまな理想や夢をもつたであろう花圃自身の諦めも語られているといつてよい。彼女自身、この作品で文壇に華々しいデビューを飾り、樋口一葉らが文学を志すきっかけ

となるほどの影響を社会に与えながら、良妻賢母への道を歩むのであるから。それにしても、どうも『浮雲』とは様子が違う。ここでは、女が学問をすることのメリットは一つも挙げられていない。学問をする女は教師となつて結婚しない、男に仕えない、或いは結婚しても弱い子しか産むことができない——これだけ否定的な見解ばかりだったとするなら、何故親は彼女たちは女学校に通わせていたのか、と疑いたくもなってくる。鹿鳴館時代に必要となつた西洋風の社交性を身につけるためだろうか。ところが、この点さえも怪しいのである。

この作品の冒頭は、鹿鳴館での夜会の場面である。「鼻たかくして眉秀で」「きはだちて色白く」「十人並には過たるかた」と描写されるのは、一に西洋、二に西洋の「洋癖家」、篠原子爵の一人娘、浜子である。彼女は父の病気のために学校は退学するが、英語の勉強は続け、交際好きでもある。「レディは才色兼備の上に。近頃は英語もお出来なさるし。ピアノ杯はことにお得意。ダンシングから何から。貴女連中との交際でも恥かしくない。」とも評される彼女は、しかし、単なる高慢なお嬢様として描かれている。彼女にはられるレットルは「不品行」であり、「おてんば」、「はねっかえり」である。母親のことを「教育なき女子」と軽んじるところはお勢と同じなのだが、浜子のことは、「こころあるものはひそかに爪はじきしてそしりあ」う。結局は彼女との婚約を破棄する養子の勤は、「兄さんは洋行した甲斐もなくやつぱり支那風の七歳男女不同席といふ腐論をおつしやるヨ。フーンと鼻で笑はれたが。そのフーンが骨身に透つてぞつとした心持がして。それから急にいやになつたのだが。」と心情を告白している。西洋にかぶれた結果は男のことを鼻で笑うような女の出来上がりであり、日本男児としてそれは耐えられないことなのだ。

それだから交際上手の女房などは。すこしも望まんのサ。僕が好みの女房は。まんざら文盲でも困るが。婦人の美德と称する従順の徳があつて。少く文字も読め齊家の道に勉力してもらひたい。三三

このように、この作では、女性が「知的」であることは、全く評価されていない。勤にとつての理想の妻は、文盲では困る、程度なのであつて、彼は女子高等教育には何の意味も感じていない。結局、浜子は勤と別家し、自らが思いを寄せていた官員と結婚するが、相手は悪党で散々財産を使い果たした上、女と行方をくらましてしまう。世間へも顔向けできず涙にくれる彼女はそれまでとはうってかわつて敬謙なクリスチャンとなる。一方の勤は、両親の死後は自分が内職をして弟の学費をまかなう、美しく慎ましい松島秀子という女性と結婚する。女学生仲間たちもそれぞれの道を進むが、幸福になる（これもつまりは良家の子弟との結婚を意味するのだが）のは美しく、分をわきまえた少女たちである。

分別のある服部は学友宮崎の兄と、美しさが評判の宮崎は松島秀子の弟と結婚するが、磊落な斎藤と、気焰を吐いていた相沢とは、「其後師範学校に入りて。何れも才學を以て名を知られたりしが。兼てかたれる志のごとく。女学士にて夫をも持たず。一生を送りしや否や。其将来は知るによしなし。」と語られるにとどまる。男性と同等に生きていこうとする少女たちは、その将来をうやむやにされてしまうのだ。

あくまでも男性をサポートするための存在——女性はそのような位置にあるべきで、高等教育はかえて害となるのだという主張は、他の作品にも表れている。三宅花圃の師であつた逍遙が明治二十二年に『國民の友』に発表した作品「細君」の主人公は、師範学校を卒業した女性である。ところが、彼女の評判がまた悪い。

夫人はまだ學校へ通ひし頃より、負惜みの強いのと愛嬌の乏しいので人に知られ、「あの様な氣前では嫁入りをしてからがどうでせう。何を言つても學問の外には取所とりえのない人ですものを。」と器量自慢は竊ひそかに讒り、「教育の學問のと申しても、女の學問は知れたもの。學問で臺所は出來ませぬ。生中ちツとばかり見識があると、高くとまるのが女の持前。權利だの同權だのと、齒の浮く事を言はれると、餘ッ程の美人でも二度と見る氣は出ぬものと、此間も宿のが言はれました。」と意氣な細君の聞えよがし。一四

彼女は結婚後も、女中には「さういふ女書生だから、臺所の事は眞暗で、いやに勘定の細かい癖に人を使ふ呼吸を知らず、目端が少しもきかぬ癖に、おつに世話を焼きたがる事」と陰口を叩かれ、離縁したいと実家に相談に行くと、「お前は學者だから、外間がどうだ斯うだとお言ひだが、妾の二三人は當然の事さ。」とあしらわれる。挙句の果てに、実家に用立てようと彼女が金を工面しに質屋へ使いをやつたことがわかると、『藪の鶯』の勤と同じように洋行帰りである夫は「生兵法は大創の元といふが、生意氣に少し計り權利だとか財産だとか間違つた事を聴きかちつて」勝手なことをした彼女の「猿智慧」を罵倒するのである。

知的であろうとするが故に、疎まれる存在——明治二十年代までの「女学生」はこのように認識されていたようである。それでは次に、女学生の服装の変遷から彼女達のイメージを追つてみたい。先にみた通り、明治の最初期に開かれた女学校は、まず男袴に身を包んだ少女たちを生み出した。次に、洋装の時代がやってくる。欧化政策と鹿鳴館時代の到来は、東京女子高等師範学校をはじめとする各府県の師範学校女子部での洋装の採用という形となって明治十八、九年頃から女学校に広まった。

しかし、この洋装は、二十年代に入り、伊藤内閣が倒れた後、あっとい
う間に廃れてしまう。結局はまた袴に逆戻りであった。

ところがこの袴、一般社会にはひどく受けが悪いものであった。その
一端は先にひいた『藪の鶯』にも表れているが、「女の風俗が大そうわ
るくなつ」たものとしてとらえられたのである。男袴をはく少女たちは、
自然に歩き方も男っぽく、肩で風を切って進むようになる。明治五年版
『新聞雑誌』三二五号には、「洋學女生と見え、大帯の上に、男子の用ゆる
袴を着し、足駄をはき、腕まくりなどして洋書を提げ、往来する者あり」
という記事もみえる。或いはこれも男と同じように、煙草をふかしなが
ら新聞に目を通したりする【図二】。これは一種のトランスヴェスタイ
ト、つまり男装に近いものであり、男性たちにとってその評判がよろし
かるうはずはない。眼鏡をかけ、高下駄で街を歩く女学生の姿は、風刺
の対象にこそなれ、美の象徴というようなものからは程遠い存在として
扱われた。『藪の鶯』や「細君」に描き出された女学生や女学校出身者
に対する辛辣な評価も、こうした世相を反映したものだったのだろう。

このように、この時代においては、「女学生」というものは、それほ
ど固まったイメージではないながらも、ネガティブな印象を人々に与え
ていたようである。ところが、明治三十年頃を境にして、マスカルチャー
の世界における袴姿の女学生のイメージが大変化を遂げるのである。

(三) ファンタズムの誕生——「新聞小説」と女学生

明治三十年八月、『風俗画報』の表紙に、池田興雲の描いた「緑陰読
書の図」が登場した。読書する二人の娘は姉妹であろうか、年少に見え
る少女は紫の着物に濃紫袴を着けている。簪と襦袢の赤が愛らしい印象



【図二】『团团珍聞』明治28年8月3日号



【図3】

である【図三】。初期の女学生の袴姿が、「袴をはいて誠に醜く、あら／＼しい姿^{二五}」と評されているのとは比べると、何たる違いであろうか。この雑誌は、明治三十一年の十月十日号の表紙には「女学生」（岡田梅村画）をもってきた【図四】。リボンや羽飾りに縁取られた少女のポートルートは、「女学生」が美の領域に入ったことを明確にあらわしている。明治二十七年に十三校、生徒数二〇二六人だった高等女学校は、二十九年には十九校四一五二人、三十年には二六校六七九人と膨れ上がった。三年の内に校数は二倍、生徒数は三倍となったわけである。この数字は、紆余曲折を経た女子教育が、「良妻賢母志向」という方向に定着し、社会がそれを受け入れたことをも示しているよう。最早、「女学生」は男性社会を脅かす存在ではなくなった。それに伴い、「海老茶式部」と呼ばれることになる袴姿の女学生たちは、今度は「花嫁候補」的な存在とし



【図4】

てまなざされるようになる。彼女たちに新しく求められるようになったのが「美」であることも、このような文脈から理解することができる。明治三十三年の『都の花』には、華族女学校の生徒の後姿が描かれ、「華族女学校の生徒の海老色霞屋の袴を穿きて優に歩み出でたる仲々に姿好し、鳩のやうに和しき肩に結ばぬ髪を橙黄色のリボンにて結び止めて垂げたる、春風軽く吹いて長袖を翻がへすところ尤も品よし」とコメントされている。袴姿に釦靴、束ねた髪にリボンという和洋折衷が彼女たちの美であった。

さて、このような世の中の動きに文学の世界が鈍感なはずはない。まず、最も大衆に近い、新聞小説というジャンルに女学生は登場することになる。

日本の新聞小説がひとつのピークを形づくったのは、尾崎紅葉の『金

色夜叉』であった。この作が日本中を熱狂させたのは、「老若婦女、桃割の娘もベッ甲ぶちの眼鏡をかけた御隠居もそれを耽読、愛誦した」という泉鏡花の言葉をまつまでもないことである。そして、この作品の大ヒットは、のちの新聞小説に大きな影響を与えることになる。紅葉自身が、明治三十五年に自作について語った文章をひいてみよう。

それから金色夜叉を書くに就いては、今一つの動機がある。それは何だといふと、僕は明治の婦人を書いて見たいと思つたのだ。宮は即ちこの明治式の婦人の権化である。であるから主人公は、貫一であるが、どうしても宮を写す場合になると、貫一よりもいくらか多く具象的になり易い。そこで、宮はかく迄明治式の婦人であるが、これが普通の明治式の婦人なら、富人富山その人の如きに嫁したらば、それなりに昔の関係を棄て、富山の夫人になつて仕舞つて、貫一を見捨て、仕舞ふのであるが、僕は宮をして超明治式の婦人たらしむるつもりで、宮をしてあのやうに悔悟の念さかんならしめたのだ。これが僕のこの篇を書いた動機だ。一七

この文章を読むと、宮が「明治式」なのか「超明治式」なのか判然としないのだが、少なくとも、紅葉の名を不朽のものにしたこの作品のヒロインが、何かそれまでの女性像とは異なる点を持った「明治の婦人」であったことは確かだろう。とすれば、後に続き、『金色夜叉』のようなヒット作を生みみたいと思つていた新聞作家たちは、「明治の女性」というものに敏感になつていゝるはずである。そして明治三十年当時、新式の明治女性の筆頭といえ、束髪にリボン、袴姿の女学生だったのである。このような背景のもと、『金色夜叉』連載中から、「女学生」は方々

の新聞小説に登場することになった。これらの新聞小説を、ここでは「女学生小説」と呼んでおこう。

まず最初にあらわれたのが、『大阪毎日新聞』紙上に明治三二年八月十七日から連載された、菊池幽芳の『己が罪』だった。

「あら善くつてよ、妾知らないわ、先生に云ひつけてあげるわ。」と云ひ捨てつゝ、結び流したる束髪を風に靡かし、海老色縹子の袴を翻へして学校の運動場を走り行く、十三四のあどなげなる少女の後を見送りて

「ほゝほゝ」と笑ひを合はしたるは十六七より八九まで三四人、いづれもこの私立高等女学校の女生徒なり。

「あの娘の姉さんなら妾見た事があつてよ、どこへお嫁にいくんですつて、まだ十六位よ、まア！」^{一八}

風に靡く結び流しの束髪、翻る海老茶袴、そして夏目漱石の『三四郎』に至るまで繰り返されることになる、「よくつてよ、知らないわ」といった「女学生ことば」……

この作品は、いわゆる「家庭小説」というジャンルの原点とされるものである。高木健夫は「家庭小説」を「一家団欒のなかで、夫も妻も娘も一様にたのしく読めるロマンス^{一九}」と定義し、現在テレビで放送されるホーム・ドラマがその骨法をそのまま受け継いでいるとしているが、読者を家庭の子女と想定すること、健全な常識や道徳に忠実で、最後はその勝利におわること、多分に情緒的であること、などが「家庭小説」の特徴といえるだろう。サントールブルーヴは新聞小説を「商業文学」と侮蔑したが、日本においてもエクリチュールに高級／低俗という差異を設け

ることがなされ続けてきた。「家庭小説」は通俗小説、大衆小説と呼ばれるものの中でも「女・子供」向けのものとして蔑まれ、まともな研究対象として扱われることは少なかったようである。しかしながら、時代の流れの中で女学生の捉えられ方を見ていこうとする時、この作品は非常に重要なものである。

先にひいた『己が罪』の冒頭部分で、女学生たちは自分たちの結婚相手のことについておしゃべりをしている。文学士が好きだの、医学士がいいの、とその会話の中に登場するのがヒロイン、箕輪環の噂である。「箕輪さんて云へばあの眞箇ですか。」女学生たちはとたんに声をひそめ、辺りを見回す。どうやら彼女は妊娠しているらしい、「呆れて仕舞ひますねえ、」……

連載初回となったこの部分には、女学生をめぐるさまざまな言説が、既に一つの方向を指し示していることが見て取れる。作品のヒロインは間もなく学校を辞め、主な舞台は彼女の波瀾万丈な結婚生活に移ることになる。その意味で、作者はヒロインを女学生に設定することにこだわってはいなかったようだ。しかし、『己が罪』の登場とその成功は、文学作品の中の女学生をある方向へ導く導火線の役割を果たしたように思える。そして、この小説以降の女学生小説における「女学生」を以下のようなものにとまとめることもできよう。

(一) 新妻予備軍 彼女たちは社会的地位の高い(身分が良い、高等教育を受けて将来性がある、など)男と結婚することを人生の目標としている。在学中にお嫁に行くのは「羨ましい」とであり、「厭よ、誰がお嫁なんかに行くもんですか、厭な事よ、ねえ」というのは、『藪の鶯』にみられたようなものではない。最早なく、単なる照れ隠しの台詞となっている。同年に発表さ

れた「高等女学校令」の良妻賢母主義とも呼応するものである。

(二) 開放的な性 彼女らは髪を風に靡かせ、袴を翻して走り回る。その姿は彼女たちがある種の特権階級に属していることを意味しているが、同時にまた、その開放性は男女交際と在学中の妊娠、というような「醜聞」を招く。

この、一見すると矛盾しているような二つの性質を兼ね備えた存在として「女学生」が捉えられていることは、大変興味深い。女学生の出自が、ごく限られたアッパーミドル以上の家庭であることから、(一)は容易に導き出される。ところが、そのような「お嬢様」が、何故性的に開放された存在になってしまふのだろうか。

高等教育を受けるために都会に出て来た若者が、そこで恋の味を知る、というプロットは、十九世紀ヨーロッパの文学作品においても珍しいものではなかった。そして、中でも、フランスにおいては、明治の日本と同様に、パリにおける学生たちの恋の相手としての「女学生 *étudiante*」の存在があった。ところが、十九世紀パリの「女学生」、実は本来の意味での学生ではなかったのである。フランスで女子高等教育の道が開かれたのは米国と比べるとかなり遅かった。中世から続く大学入学資格、バカロレアに初めて女性が合格したのは一八六四年だったが、実際に女性のための高等教育機関、女子リセが開設されたのは一八八〇年のことだった。それでは、それ以前に使われていた「エテュディアン ト(女学生)」という言葉が誰を指していたのか。ロレダン・ラルシェの『言語奇行 (*Les Excentricités du Langage*)」(一八六五年)は、次のような明快な定義を下す。「女学生：学生の愛人」。そして、当時における「女学生」は、以下のシャノンソンにも歌われるように、「グリゼッ

ト grisetete」とも同義語として使われることが多かった。

粹なボンネットの下の生き生きとしたかわいい顔、

チャーミングで陽気なグリゼット、

気取らぬダンスパーティーの飾らぬ女王、

一体君はどこにいるの、優しい女学生さん？……。

もともと婦人服用の布地の意であった *grisetete* という語は、「生活水準の低い、おしゃれな若い女性、特に浮気な女子労働者（十九世紀ラルース）」を指す言葉として十九世紀に定着した。一八六〇年に出版された『フランス人の自画像』は、「食料品屋」に続いて「グリゼット」を取り上げ、「全てのパリの産物の中で、最もパリの産物は、異論の余地なくグリゼットである。（中略）ロンドンでも、サンクト・ペテルブルグでも、ベルリンでも、フィラデルフィアでも、こんなに若く、陽気で、瑞々しく、きゃしゃで、繊細で、身軽で、少しのことに満足する、グリゼットと呼ばれる存在に出会うことはない。三」と書き出している。そして、パリの左岸、カルティエ・ラタン界隈の屋根裏部屋に住み、お針子や女工として働く彼女たちが、十九世紀文学の中で、異彩を放つ存在であったことは、鹿島茂の指摘する通りである^{三〇}。

天気の良い日曜日には、カフェや遊歩道や郊外の酒場はカップルでいっぱいだよ！グリゼットで溢れ返った、ラヌラーやベルヴィル行きの大きな乗合馬車のことを考えてもごらんよ。休日にサン・ジャック街からどの位繰り出すか数えるんだ。帽子屋のお針子の大隊、下着屋のお針子軍、煙草の売り子たちの大群、皆楽しんで、恋人を持ち、雀の群

れのようにパリ周辺の田舎のあずまやに舞い降りるのだよ。^{三一}

これは、グリゼット物語の定番ともいえるべきミュッセの『ミミ・パンソン』（一八四五年）で、遊び人の医学生、マルセルが友人に語る言葉だが、マルセルはまた、グリゼットの美点を列挙する。清纯であること、正直であること、こざれいにしていいること、率直なこと、質素で無駄遣いをしないこと、とても陽気なこと、邪魔にならないこと、おしゃべりでないこと……。「要するに、僕は彼女たちは優しく、誠実で私欲がないいい子たちだとつくづく思うんだよ、そして、そんな彼女たちが病院で一生を終えるなんて残念だっかね。」

しかし、このマルセルの発言から読み取れるのは、学生たちが、グリゼットを手軽な恋人位にしか考えていない、という事実である。フロール^{三二}の『感情教育』でも、グリゼットは男にとって都合の良い存在として描かれている。法科大学を出て公証人の書記をしているデローリエは、軍服に刺繍をするお針子を、出会った最初の日から誘惑し、ものにしていく。男は尊大に構えているのに、女はいつも彼のために董の小さな花束を持ってやってくる。彼らの関係はしばらく続くが、のちに弁護士となったデローリエは、彼女に「愛してなんかほしくない、世話をししてほしいんだ^{三四}」とまで言い放つのである。

では、何故グリゼットたちがパリの大学生の格好の恋の対象になったのか。それは、彼女たちが下宿暮らしをしていたからであった。無論、先に挙げたマルセルの列挙のような要因もあったには違いないが、遊びたい盛りの若い娘が一人暮らしをしていれば、若者たちにチャンスはいくらでもあったのである。

そして、まさにこの点において、日本の女学生はグリゼットたちと同

じような状況におかれていたのである。労働者階級出身で、兎にも角にも働いて食べていかななくてはならなかったグリゼットたちとは異なり、日本の女学生は、先に述べたように良家の出身だった。ところが、こうした少女たちの暮らしぶりを見ると、驚くほど隙だらけなのである。自宅から通う少女たちはともかく、地方から都会の女学校に出て来た少女たちは、いきなり下宿生活を始めることになった。そして、この下宿生活の中で、彼女たちは驚くほど無防備だったのである。

有名なエピソードを一つひいてみたい。樋口一葉の、半井桃水への思慕はよく知られているが、明治二十四年の秋に、桃水にちよつとしたスキャンダルが持ちあがった。半井家に寄宿していた、東京府高等女学校生鶴田たみ子が、桃水の子を産んだという噂が広まったのである。この事件は一葉の男性不信を募らせたともいわれており、一葉研究の側から語り継がれているのだが、ここでたみ子に視点を移してみたい。実際のところは、桃水の弟浩がたみ子の相手であり、当時二十四歳の浩と、十九歳のたみ子の恋愛の末の妊娠だったらしい。しかし、いづれにせよ、女学生だったたみ子は、卒業間近でありながら郷里に帰って女兒を出産しているのである。「恋愛」の讚美と、理念ばかりが先走った「男女交際」は、一方では潔癖なカップルをも生んだのかも知れないが、他方では、性に関する知識も充分でない少女の妊娠、というような事態も引き起こした。下宿している女学生には監督者もおらず、性行為や妊娠に対しては殆ど何の知識もない状態だったのである。

女学生小説が描き出したのは、このような状況だった。『己が罪』においては、攝津の豪農である主人公の父が、尊敬する国会議員の薦めで十四歳の娘を東京の高等女学校に入れている。彼女は、当初の二年間は議員の知人宅に寄宿し、その後通学校の教師の所に下宿するのである。

この、下宿先の主人というのも曲者だった。彼女たち（縁戚や紹介などの関係がない、または薄い場合、女性であることが多い）は、少女たちを守る存在ではない。それどころか、彼女たちは、多くのフィクションでは、寧ろ男との密会を唆すような役割を持っている。『己が罪』では、金持ちで遊び人の医学生が「餘り厳格なる婦人にあらざるのみか、金銭のためには大抵の事は辞せざる可き性質がなる」^五下宿先の教師にまず近づく。その結果、彼女はヒロインに医学生を売り込み、あろうことか、自分と二人だと偽って箱根旅行にヒロインを連出して、医学生と落ち合い、自分だけが帰ってしまうのである。

心もとない下宿生活を送っている世間知らずのお嬢さん——男性にとってみれば、これはこの上なく都合のいい存在だということもできよう。こうして見てくると、この時代に女学生が期待されているのは、「知的な存在」であることではないようである。

(四) 「神話」の確立

さて、次に女学生を擁してあらわれ、これも大当たりをとったのが、明治三四年六月から九月まで『読売新聞』に連載された、山岸荷葉の『紺暖簾』であった。日本橋の硝子問屋の息子であった荷葉は、当時の日本橋界隈の情緒や風俗を巧みに描き出し、この作は『金色夜叉』以来の新聞小説におけるヒット作ともいわれた。「いたつて統一のない陳腐な奇遇小説、因縁小説」であり、「駄作中の駄作」と断じた『帝国文学』評もみられるが、この作品が、梶田半古の挿絵の魅力もあいまって読者の心を掴んだのは事実だったのである。そして、この作にいたっては、女学生の風俗がより緻密に語られることとなった。「硝子戸の音して現

れたのは、十八になる預かり娘の、お扇がフラネル姿で、いつもの束髪に変わった結綿に、浴後の薄化粧は殊更に媚いて、その細面に片多くぼこそ一種の美しさを形造つてゐるもの。」と最初の場面から登場するのは、お扇という美しい女学生である。

「あら、鍬研屋さんの方ね。」ほくくとかの片多くぼで笑つて見せ、「今晚は……。私は誰方かと存じましたわ。」

さも白々しう、而も其切口上は通学する女学校仕入れで、見も馴れぬ男にすら、さのみにも差汲まぬのが此娘の性。二六

残念ながら、ここでも「女学校仕入れ」の闊達さは評価されない。彼女が思いを寄せる隣家の息子、暁太郎は彼女のことを疎んじて愛らしい半玉を愛するし、暁太郎の義理の母も彼女の直情を「蓮葉」と憎むようになるのである。しかし、この小説では、お扇や女学生たちは単に批判のみされているわけではない。彼女たちが女学校を散策する情景は、実に美しく描写される。

絹縮の振袖ほど長目の袂に、かの鰻茶の袴は裾のみ花に隠れて、まだ肩上げの除れもやらぬに、束ねた髪に白茶のリボンを翳したのが、何ともしもなく池の面を眺めてゐる様。

一度飛去つた雙ひの蝶はいづくよりともなく又現はれて、例の舞ひ狂ひ、馴れ睦む氣色と見れば又た離れ、遠く近く、花の蔭、水の上、誰が弄ぶか洋琴オルガンの音の幽に傳はる。

其所に稍暫時佇んでゐるが、其釦靴を少し踏み鳴らして、苔もまだ固き花の下に位置を替へて、又も眺むる池の水。

とある内にかの小逕に人の来る氣配して、石の玉垣のあたりから現れたのは是もまた鰻茶の袴。清げなる揚巻に薩摩飛白の単衣を着て、つぼめた蝙蝠に紫縮緬の本抱を抱へてゐる、十七ばかりと見えて品あるその姿。二七

江戸の小説世界においては、「文章をもつて絵の代用にもなるが如き、感覚的に明確な描写二八」が発達していた。中村幸彦は『戯作論』の中で、「登場する男女の風姿は必ず鬪風、衣服、履物、年齢、丈高、肥瘦、器量骨柄や、行動言語における癖までも、微細に記述」するのが洒落本の文章だとしている。そして、女学生小説は、この手法を受け継いで読者の想像力に働きかけた。括弧つきの「女学生」という存在がすでにある種のファンタズムを呼び起こすものであったことは、ここにもみてとれるだろう。先にも述べたように、彼女たちの美は和洋折衷の美であり、それ故、彼女たちにはリボンやオルガンやパラソルといった、舶来の小物が似合った。この作品の連載が始まる少し前、五月十日の東京朝日新聞には、「薔薇のかをり」と題して向島の長春園の薔薇の記事が掲載されたが、ここにも洋風の美を司る存在として女学生があしらわれている。「桜ハ華美を好む紅裙の態藤ハゆゑづきたる深窓の美人牡丹ハ裕々たる豪家の麗姫各々其色を争ひ其香を競ひて春の園生ハ賑はしかりしが猶薔薇の香の高き其色の潔きにハ如かざるべしされバエデンの園に神の接吻くちづけをうけしより常に神秘の香に現れて詩家が心を動せし事幾何ぞや」と薔薇を称える記事の真ん中には、大きなリボンに袴姿の女学生が、薔薇の花に顔を寄せる口絵が挿入されているのである【図五】。「立てば芍薬座れば牡丹、歩く姿は百合の花」というように、美人は花と形容されてきたが、女学生はそのいづれでもなく、「エデンの園に神の接吻くちづけをうけ」

たという、西洋的ロマンティズムに飾られた薔薇であった。ここに至って「女学生」は「西洋風」——とはいっても『薔薇の鶯』で排斥されたような、徹底した西洋趣味ではなく、あくまでも華やかさを伴ったファッションとしての「風」なのであるが——であるという新しい性質が加えられている。そして、西洋文学の中に見られるような「西洋風」の恋愛に憧れる若者たちにとっては、その恋愛の相手も「西洋風」であることが望ましかった。その意味でも、女学生はびったりの存在となったのである。

この作品のヒットは、新聞小説の世界に、続く女学生ヒロインを即座に生み出した。「聖皇の女學校の門内から、海老茶の袴連が陸續と出る中に、下女を従へた十八九のと、その連の十七八のものが、揃ひも揃つて目に立つ美人だ」と始まる武田仰天子の「梅若心中」(『東京朝日新聞』明治三四年)などはその一例で、このような新聞小説とそこに添えられた挿絵は、人々の心の中に「美しい女学生」の存在を刷り込んでいくことになる。

しかし、『紺暖簾』が描き出したのは、ヒロインにふさわしい女学生の姿ばかりではなかった。この作品においては、『己が罪』からもう一步進んで、「女学生」という存在自体が、「淫奔」と評価されることが描き出されている。これは小説の中で、お扇の親友によって嘆じられる。

いつぞや五年級の方のお話でしたつけ。此頃……ではございません、余程以前からですとか、女学生といふと一概に淫奔であるの、不徳であるの、軽薄であるのと申して、世間ではあの醜業婦よりも、一層忌み嫌ふやうになつて居るのださうでございますのね。

一定の制規の下にひだの正しい袴を穿いて、講堂に端座すべき女学生



【図5】

でありながら、之を守る方と申しては、現在数える程しかないの
ざいます。他の女学生といふ女学生は、餘所の学校はどうで
ざいますか存じませんが、朝毎にリボンを取替へ、傘の色もなるべく
花のやうなのを競うて翳し、袴まで布地の選択をしたりして、日々
通学には互に其形装の美しきを、誇らうとする心ばかりで、学業藝術
を勵まうと申す方は尠く、扣所の暖爐の前、運動場の藤棚の下は、所
謂『戀愛』とか、『良人』とかを説く所であつて、ロオンテニスすら眞
面目に、弄ぶものはない位なのですつてよ。二元

明治二十年頃には「肩をいからしたり」「生いきな慷慨なことをいつ」
たりする故に女学生は疎まれた。ところがそれから十年経つて、今度は
「其形装の美しきを誇り」、「戀愛」とか、『良人』とかを説くのが
彼女たちの専売特許とみなされるようになってしまったのである。この
百八十度の転回には驚きを禁じ得ないが、当時が女学校乱立時代でもあ
り、一気に「女学生」が増えたことも一因かも知れない。

三十四年の春からは立つはく雨後の筍の如く私立女学校は立ち
ました。従て地方の女學生が数知れず都に入り込むで茲に女學生とい
ふ一種輕蔑の意味を含んだ詞が生れて來ました。三〇

ここにも述べられている通り、明治三十四年には高等女学校の数は
七〇校を数え、生徒数は一七五四〇人にも上つた。都会の女学校に行く
ことが一種の流行になつてしまひ、もともとそれほど意志をもって女
学校に入つてきたのではないお嬢さんたちが学生の大半を占めるようにな
つたとすると、彼女たちがお洒落を楽しむようになるのは当然でもあ

る。そしてまた、地方出身者が多くなると、下宿住まいの美しい少女た
ちは、若者たちの格好の「戀愛」の対象となる。女学生の方でも自分た
ちが「開かれた」存在であるという自覚もあり、北村透谷の戀愛讃歌は
彼女らにとつても憧れだったであろう。

また、実際に起こつた事件の影響も見過ごすわけにはいかない。創刊
以来、読み物、雜報に重きをおく小新聞的な性格を維持してきた東京朝
日新聞からいくつか事件を拾つてみると、彼女たちが積極的（お転婆）
である時、或いは性的に奔放である時、新聞が取り上げることがわか
かる。まず第一点の積極性については、明治三十四年二月十七日に「令嬢
の木曾殿」という記事がみえる。これは豊多摩郡に住む某軍吏の令嬢が
父親の馬を勝手に乗り出し大騒ぎになつたというものであつた。「田鶴
子（十八）ハ海老茶袴の裾もはら／＼學校通ひに餘念なく頻りに氣分
が結ばれしより」と彼女が「海老茶式部」であることがまず強調される。
そして、彼女の行動は「嫁入頃の令嬢ながらこの子何處へ歸いでもこん
なお茶ッぴいで家人に宜しくあるまい」と歸結される。

一方で、明治三十四年三月二六日には「莫連女學生の身の果」というス
キャンダラスな記事が載っている。茨城から女学校へ入るために上京し
た少女が、学生と恋仲になつて学資を使い果たした上に妊娠し、男にも
逃げられたので出産した赤子を捨てて国へ歸つた。しかしまた東京が恋
しくなつたので親をだまして学資をせびり、今度は無論学校へなど行く
気はないので情夫と共にこの金を使い果たした後は奉公しては金を盗む
ということを繰り返し、遂には金持ちの外妾となつていたのを御用となつ
た、という事件である。「莫連女學生の末路常に斯くの如し戒むべき事
なるかな」と記事は結ばれているが、その扱いぶりからして、この事件
が当時としてそれほど突飛なものではなかつたことがわかる。ニュース

種にはなるが、大騒ぎするほどのことではない、というこの新聞社の姿勢からは、他にも似たようなことは起こっていたのではないかと推測される。このようにして、一般世論に女学生と性的奔放さが結び付けられて考えられていくのである。

おわりに

以上見てきたように、洋風の美を持ち、何事にも積極的で、性的にも奔放だという「女学生神話」は、高等女学校の乱立、下宿環境、マスメディアにおけるスクランダルの報道や小説の影響を背景として、明治三十四年には確立していたと考えられる。この時点では、彼女たちの知性はお飾り程度のものでしかない。そして、

ゴールド眼鏡のハイカラは 都の西の目白台 ガールユニバシチーの
スクールガール

片手にバイロンゲーテの詩 口には唱へる自然主義

早稲田の稲穂がサーラサラ 魔風恋風をよそよと……

ともうたわれた、小杉天外の『魔風戀風』が『読売新聞』紙上に登場するのは、その二年後のことである。

注

- 一 上野千鶴子、水田宗子、浅田彰、柄谷行人「共同討議 日本文化とジェンダー」『批評空間』第二期第三号、一九九四年十月、三五頁
- 二 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』青土社、一九九〇年、八八〜九七頁、佐伯順子「色」と「愛」の比較文化史『岩波書店、一九九八年、

一六一〜一六四頁

三 青山なを『明治女学校の研究』慶応通信、昭和四五年、を参照。但し、設立間もなく廃校になったところや、他校と合併したところも多く、注十六に挙げた『中央公論』の記事からも、同時期に五十校が併存していたとは考えにくい。

四 北海道帝国大学編『創基五十年記念 北海道帝国大学沿革史』、社文栄堂、大正十五年、十二頁

五 『明治女学校の研究』四三五頁

六 リリアン・フェダマン『レスピアン』富岡明美・原美奈子訳、築摩書房、一九九六年、十四頁

七 フェダマンの前掲書は、ボルティモアの上流階級に属する一族が、大学へ行きたいという娘の願いを「売春と同じくらい衝撃的な選択」と見做しているというエピソードを紹介している。

八 三宅花圃述、神崎清記「お茶の水時代」『明治文学全集』第八一卷、築摩書房、昭和四一年、四〇七頁

九 二葉亭四迷『浮雲』、『二葉亭四迷全集』第一巻、岩波書店、一九六四年、

十四頁、三宅花圃『薺の鶯』『現代日本文学大系』第五巻、築摩書房、昭和四七年、一三三頁

一 一 とはいっても、全くなかったというわけではない。その中の一つ、「エス」については拙稿「新しい女」からの発信——『あきらめ』再読」（『人文論叢』第十七号、二八〜二九頁）等参照。

二 『薺の鶯』一三四頁

三 『薺の鶯』一三八頁

四 『逍遙選集』別冊第一、春陽堂、昭和二年（第一書房、昭和五年復刻）、八四五〜六頁

五 『読売新聞』明治八年十月八日

書かれている。

- 一六 成川生「女子教育の将来」『中央公論』明治三十七年十月号、七九〜八〇頁
- 一七 『紅葉全集』第十卷、岩波書店、一九九四年、三二八頁
- 一八 菊池幽芳『己が罪』『明治大正文学全集』第十八卷、春陽堂、昭和三年、一頁
- 一九 高木健夫『新聞小説史 明治篇』国書刊行会、昭和四九年、三四四頁
- 二〇 Larousse, Pierre. *Grand Dictionnaire Universel du XIX Siècle*, Lacour, 一六六一〜一六六二 (Collection Rediviva, 1240), "Etudiant"
- 二一 *Les Français peints par eux-mêmes*, Tome Premier, Paris, L. Curmer, 一八六〇, (復刻版 本の友社、一九九九年), p. 7
- 二二 鹿島茂『職業別パリ風俗』白水社、一九九九年、七〜十六頁
- 二三 Musset, Alfred de. *Mimi Pinson, Oeuvres Complètes*, vol. 1. Seuil, 一六〇一 pp. 104-107
- 二四 Flaubert, Gustave. *L'Education Sentimentale, Oeuvres II*, Gallimard, 一六〇一 p. 110
- 二五 『己が罪』、六頁
- 二六 山岸荷葉『紺暖簾』『明治文学全集』第二卷、築摩書房、昭和四四年、二四八頁
- 二七 『紺暖簾』二六六頁
- 二八 中村幸彦『戯作論』角川書店、昭和四一年、二四一頁
- 二九 『紺暖簾』二六八頁
- 三〇 曙女史「最近十五年間に於ける東京女學生風俗の變遷」『女學世界』第九卷第十四号、明治四十二年、一二三頁
- 三一 明治四二年に作られた「ハイカラ節」の一節。唐沢富太郎『学生の歴史』創文社、昭和三〇年、一二四頁より転載。また、この流行歌は、大正時代には「早稲田よいとこ 目白をうけて 魔風恋風そよそよ」という風に、少し形を変えて歌い継がれていたらしいことが、『新聞小説史 明治篇』には